富山県
中央植物園だより
2002.
10・11・12月号
（通巻25号）

ジュウガツザクラ　*Prunus* × *subhirtella*　Miq.　'Autumnalis'
エドヒガンとマメザクラの交雑種といわれるコヒガンザクラの園芸品種の一つ。花は白色から淡紅色の八重咲きで、名前の通り10月頃から咲き始め、冬の間も少しずつ咲き続ける。園内ではサクラ・ウメ園に植えられている。

趣味の園芸フェアが開催されました

活動報告……ゲッカビジン観賞、食虫植物展ほか
話題の植物……ヤマトゲバンレイシ、クチナシ
研究紹介……富山県内のコナラ二次林の種類組成と遷移

ドリアス

http://www.bgtym.org

趣味の園芸フェアが開催されました

富山県中央植物園のある婦中町は、今年で町制60周年を迎えました。これを記念して、去る8月25日(日)に、園内のサンライトホール・特設ステージで婦中町とNHK富山放送局の主催による「趣味の園芸フェア」が開催されました。花と緑を通じ人々とのふれあいの場を提供し、自然豊かな潤いのある生活・地域づくりを提案するもので、NHK「趣味の園芸」の公開収録のほか、園芸相談や歌謡ステージなど多彩なイベントが実施されました。

「趣味の園芸」の公開収録

会場となったサンライトホールには、事前に応募のあった250名あまりの方々が続々と来場し、12時30分からの開演を待ちました。収録に先立って園芸クイズが行われ、「トルコギキョウは何科？」「ハギ、キク、クズのうち秋の七草に含まれない植物はどれ？」などの問題が出されると、会場からはいっせいに手が上がっていました。

婦中町の町制60周年を記念して、富山県中央植物園で開催された趣味の園芸フェア。

会場の雰囲気が盛り上がってきた頃、いよいよ「趣味の園芸」の収録が始まりました。今回のテーマは、花のある暮らし「シュウメイギク」と、咲かせよう育てよう「葉色が美しい観葉植物」。講師は園芸研究家の小笠原亮さん、聞き手は柳生慎吾さんと須磨佳津江さんでした。

日本の秋を彩る代表的な花であるシュウメイギクは、「キク」とはいってもキンポウゲ科アネモネ属の植物で、中国から渡来したといわれています。小笠原さんは古文書を示しながら、江戸時代前期にはすでに観賞用の植物として栽培されていたことなどを説明されました。当時は「秋明菊」のほか「秋牡丹」「紫衣菊」「貴船菊」「唐菊」などと呼ばれ、花色はいずれも濃いピンクで、白花のものは明治以降に台湾から輸入されたものだそうです。また、従来のものは草丈が高くなるのに対し、最近では小型の品種も見られることなどが紹介されました。

シュウメイギクをテーマにとりあげて行われた「趣味の園芸」の収録。左から、須磨さん、柳生さん、小笠原さん。

管理の仕方としては、購入後、意外とすぐに枯らせてしまう場合があり、多くは「水切れ」が原因だそうです。これを防ぐには大きな鉢か底面給水の鉢に植え替える必要があるということで、底面給水鉢の作り方が実演されました。このほか、置き場は西日を避けた

明るい半日陰に置くこと、花後は花茎を切り取り、葉が黄色くなったら地上部を刈り込んで戸外で越冬させること、植え替えは10～11月か3月頃に行うことなどが説明されました。

後半は観葉植物がとりあげられました。熱帯や亜熱帯原産のものが多い観葉植物ですが、夏の猛暑は決してよい環境ではなく、暑さの峠も超え昼夜の温度差が出てくるこれからの季節が観葉植物にとってのベストシーズンとなるそうです。小笠原さんはここでも古文書を示され、富山のお殿様は昔から観葉植物がお好みだったという逸話が紹介されました。

品種紹介では「カラーリーフプランツ」と呼ばれ葉色が銀、青、黄、銅、赤色などに変化するディフェンバッキアやドラセナ、クロトン、耐寒性があり一年中戸外でも楽しめるハツユキカズラ（ゴシキカズラ）、カレックス（ベアーグラス）などがとりあげられました。管理の仕方が紹介されたあと、数種類の観葉植物を使った寄せ植えの実演が行われました。

「花と緑の歌謡ステージ」には、歌手の門倉有希さん（上）と角川博さん（下）が出演。

番組の収録後には園芸相談が行われた。

最後に富山県中央植物園についての感想などが述べられましたが、小笠原さんは中国雲南省原産のチヨウキンレン（バショウ科）が富山の屋外でも育っていることに驚いていらっしゃいました。

収録の終了後、園芸相談が行われました。キョウガノコのうどん粉病の防除から、ゴムノキの取り木の方法、熟す前にブドウの実がしぼんできたがどうすればよいかなど、会場から次々と出される質問に、小笠原さんは明快に答えていました。

花と緑の歌謡ステージ

続いて午後2時からは、同じ会場で「花と緑の歌謡ステージ」が開催されました。NHK富山放送局の斉藤孝信アナウンサーの司会で、歌手の門倉有希さんと角川博さんが歌を披露し、観客を魅了しました。

会場には250名あまりの来場者があった。

夜間開園　ゲッカビジン観賞

ゲッカビジンの開花にあわせて７月14日と15日の夜に開催されました。14日は約150輪、15日は約10輪が開花しました。ゲッカビジンは咲く当日の朝にならないと確実にその夜に花が咲くかどうかわからないため、事前の広報が難しいのが悩みです。今回は、直前に友の会会員の皆さんにお知らせしたほか、ラジオでも紹介され、２日間であわせて約590名の来園者がありました。

会場のサンライトホールにはゲッカビジンの大株13鉢が並べられた。

食虫植物展

７月19日～31日にサンライトホールで開催され、食虫植物の定義、分類、生態、分布、捕虫の仕方などについて実物とパネルで紹介しました。展示スペース入口には10種類50株のウツボカズラと100株のサラセニアが配置され、来園者に展示をアピールしました。訪れた人たちはウツボカズラの捕虫器官を手にとって観察したり、ハエトリグサの葉の閉じる速さに驚いたり、モウセンゴケの粘つく葉に触れたりして、虫を捕らえる仕組みに感心していました。また、夏休みの自由研究にするためか、熱心にメモをとり、写真を撮影する子供たちの姿が目立ちました。

会場入口を飾った約50株のウツボカズラと約100株のサラセニア。

友の会植物画部会作品展

富山県中央植物園友の会植物画部会の作品展が、８月26日～９月18日にサンライトホールで開催されました。友の会植物画部会は、平成５年秋に植物園で開催された第１回植物画講習会の後に有志が集まって始まりました。当初は友の会が発足しておらず、「植物画同好会」という名前でスタートし、会員数は約30名でした。月１回、植物園に集まって植物画を描き、互いに批評しながら上達を目指しており、現在、会員数は80名に達しています。
今回の展示は植物画部会としては初めての作品展となるもので、26名の会員から78点の出展がありました。最近では他の植物園主催のコンクールに入賞する会員も出てきたそうですが、そうしたレベルの高さを示す作品が多く見られました。

右：出展された作品から。村　笑子さんによるハランとハウチワカエデ。

講演会　変わり咲きアサガオ

7月28日に仁田坂英二先生（九州大学）をお招きして開催され、25名の参加がありました。アサガオといえば日本の夏を涼しげに彩る代表的な花ですが、江戸時代には、およそアサガオとは思えぬほどに姿を変えた「変わり咲きアサガオ」が趣味人たちを魅了しました。しかし、その変化の仕組みが生物学的に解明されたのはつい最近のことです。講演会では、変化アサガオ研究の第一人者である仁田坂先生に、アサガオの初歩から最新の遺伝学的研究まで、盛り沢山の興味深いお話をうかがいました。

変わり咲きアサガオの不思議と魅力について紹介していただいた。

植物染め講習会

足立紀美子先生（女子美術大学）を講師にお迎えして8月3日に開催され、13名の参加がありました。今回のテーマは「青を染める」。アイの葉を発酵させた「すくも」と、昨年秋に採集して冷凍保存しておいたクサギの果実を使って、絹のハンカチを青色に染める実習を行いました。また、カリヤスとタマネギの外皮を使って黄色に染めた後、青色の染色を行うことによって、緑色に染まることも体験しました。参加者からは「足立先生の説明がとてもわかりやすく、植物染めに大いに興味を持ちました」「植物によって同じ黄色、青でも違いがあり、植物の不思議を感じました」などの感想が寄せられました。

今回は「青を染める」のテーマで行われた植物染め講習会。

植物学講座　粘菌(変形菌)の観察

松本　淳先生（慶應義塾大学）を講師にお迎えして8月25日に開催され、12名の参加がありました。ほこりのような小さな胞子が発芽して小さなアメーバとなり、成長して巨大アメーバ（変形体）となった後、小さいながらも華麗なきのこ（子実体）を作り、やがてまた無数の胞子を出すというユニークな一生を送る粘菌（変形菌）について、ビデオ映像を交えながら興味深いお話をうかがいました。また、松本先生が持参された標本を顕微鏡で観察しながら検索表と照らし合わせ、属レベルまでの同定を行う実習も行われました。参加者からは、「ミクロの世界の面白さがわかりました。こんな生き物もあるのかとおどろきました。また一つ、屋外での観察の幅が広がりました」などの感想が寄せられました。

ユニークな生活史をもつ粘菌について、その魅力、構造、採集方法などについてお話をうかがった。

ヤマトゲバンレイシ
Annona montana Macfad.

中央植物園の「熱帯果樹室」では、いろいろなトロピカルフルーツが実っている様子を見ることができます。おなじみのバナナやパパイアなどは、一年中、実をつけていますが、この温室にはほかにも珍しい果物がたくさんあります。今回は、ちょっと変わった熱帯の果物をご紹介しましょう。

ヤマトゲバンレイシは中央アメリカ原産のバンレイシ科の熱帯果樹で、名前の由来となった果実の表面のトゲは、めしべの先の突起が変化したものです。果実の中にはたくさんの黒い種子が入っており、その種子を包む袋に果汁が含まれています。味は甘酸っぱく、リンゴ、パイナップル、バナナを合わせたような不思議な味と香りがあります。

見かけはグロテスクなヤマトゲバンレイシの果実

中央植物園では、毎年三個ほどが結実していましたが、今年は三十個ほどの果実がつき、枝がしなるほどです。　（技師　兼本　正）

クチナシ
Gardenia jasminoides Ellis f. *grandiflora* (Lour.) Makino

夏に甘い香りを漂わせるクチナシの白い花をご存知の方は多いことと思いますが、しかし、その果実を見たことのある方は少ないかもしれません。それもそのはず、香りの強いのは八重咲きの園芸品種で、一般に結実しないからです。野生のクチナシは西日本の照葉樹林内に生育し、高さ10mに達します。花は一重咲きで、晩秋に黄色から朱色の果実をつけます。この果実は黄色の色素として用いられ、我々が目にするものでは、栗金団（くりきんとん）の黄色にはクチナシの色素が加えられています。植物園では「染めの植物コーナー」で見ることができ、冬には雪囲いをするので見難くなりますが、鳥に食べられずに残るので長い期間観察できます。

（主任研究員　山下寿之）

クチナシの果実は染色に用いられるほか、山梔子（さんしし）の名で生薬としても利用される。

富山県内のコナラ二次林の種類組成と遷移

主任研究員　山下寿之

呉羽丘陵に広がっているようなコナラを主体とする雑木林は、20～30年に一度伐採して炭や薪、きのこ栽培に利用されてきました。過疎化や農業の近代化に伴い利用されずに放置される雑木林が全国的に増加しています。このように人手が加わった林は二次林とよばれ、これまで自然林に比べて低い評価をうけ、開発の対象にされてきました。ところが近年、都市近郊における生物の種類が豊富な場所として、雑木林の価値が見直されてきています。

富山県には約470km^{2}のコナラ二次林があるといわれています。平成12年に富山県内のコナラ二次林を構成する種類組成と林冠を形成しているコナラに代わると考えられる高木性樹木の稚樹の出現状況を30ヵ所で調査しました。その結果、群落の構成種の違いからコナラ二次林は3つのグループに分けることができ、第1のグループは比較的標高の高い所に分布し、ミズナラなどの冷温帯性の種類を含む特徴があります。第2グループは北陸地方のコナラ林の典型的な種類組成をもち、第3グループはササ類が低木層や草本層で優占することで、出現種数がきわめて少なく、このグループに特徴的な種類がないことで区別されました。

グループ別に高木性樹木が低木層や草本層に出現した調査区数をみると、グループ1ではコナラおよびアカガシの稚樹が出現する調査区が多く、林冠のコナラに代わってアカガシが優占する林に、グループ2ではウラジロガシが出現する調査区が多くウラジロガシ林へとそれぞれ遷移することが示唆されました。グループ3ではササ類の影響をうけて、高木性樹木の稚樹はほとんど出現しないことから、ササ類の除去などの管理がおこなわれないと森林の維持は難しいと思われます。

関東地方の雑木林ではコナラ林はシラカシ林へ遷移するといわれてます。しかし、富山県ではシラカシの自生がなく、母樹となるものは屋敷林など一部に植栽されているものの少ないことから、コナラ林林床での稚樹の発生が極めて少なかったと思われます。従って富山ではシラカシ林に遷移せずに、アカガシやウラジロガシの林へ遷移する可能性が高いと考えられます。また、県内のコナラ二次林は近年アカマツ林から遷移して成立した若齢林と、以前からコナラ林で伐採を停止してから時間が経った老齢林があります。老齢林の場合はコナラを伐採しても萌芽再生する可能性が低いことが知られており、もし伐採するとカシ類への遷移を促進することになります。県林業試験場でもコナラ老齢林の利用および再生を現在検討しています。我々の身近に存在するコナラ二次林を今後どのようにするかを、早いうちに考えておく必要があります。

身近な雑木林は、生物の種類が豊富な場所として近年その価値が見直されている。

これからが見ごろの植物

ノジギク　11月　海岸の植物

ハナノキ（紅葉）
11月　クリ・コナラの森

ムラサキシキブ
10月～11月　クリ・コナラの森

お　知　ら　せ

イベント案内

■サンライトホール展示

企画展　カボチャとヒョウタン　9月20日(金)～10月23日(水)
植物画展　11月1日(金)～13日(水)
私の植物写真展　11月15日(金)～12月11日(水)
企画展　干支にちなんだ植物展　12月13日(金)～1月15日(水)

■観察会、講座・講習会

どんぐりで遊ぼう　★
　日　時：10月20日(日)　13：00～16：00
　場　所：研修室
　定　員：40名　◆要申込

第19回　植物画講習会（県民カレッジ連携講座）
　日　時：11月9日(土)・10日(日)10：00～16：00
　場　所：研修室
　講　師：豊田路子、岡田宗男（フェアリーリング会会員）
　定　員：50名　◆要申込

第10回　TOYAMA植物フォーラム
　「外来植物と生態系の保全―植生復元の落とし穴―」★
　日　時：11月17日(日)　13：00～16：00
　場　所：研修室
　講師・演題：
　　鷲谷いずみ（東京大学　教授）
　　「日本における外来植物問題の検討と対策にむけて」
　　梅原　徹（環境設計㈱　調査研究室長）
　　「公共工事におけるノリ面緑化に伴う外来種導入の実例と望ましい植生復元」
　　上赤博文（佐賀県教育センター　研究員）
　　「学校教育や地域活動に伴う外来種移入の実例と生態系への影響について」

電子顕微鏡で植物を観察しよう
　日　時：1月26日(日)　13：00～16：00
　場　所：実習室
　定　員：12名　◆要申込

■月例行事

日曜植物案内
　開催日：10月6日(日)、11月3日(日)、12月1日(日)、1月5日(日)
　時　間：11：00～12：00

植物園オリエンテーリング
　開催日：10月20日(日)
　時　間：10：30～12：30

◆要申込　このマークの講座・講習会は事前の申込が必要です。申込は開催の1ヶ月前から往復はがきで受け付けています。
★　このマークの講座・講習会は中央植物園ボランティア養成講座です。

年末年始の休園日について

年末年始の休園日は、12月28日(土)～1月4日(土)です。年明けは1月5日(日)から開園します。

友の会会員募集中!

富山県中央植物園友の会は、中央植物園を中心に植物の観察・学習などを行い、植物についての知識を深めるとともに、植物園の諸活動に協力することを目的とした会です。

入会されますと、会員証を示しサインするだけで中央植物園に入園できます。また、会報や植物園だよりが送られてくるほか、多彩な友の会の行事にご参加いただけます。

会費は年額3,000円。有効期間はご入会の日から翌年の3月31日までです。なお、新規の方は、加入月によりその年度の会費の割引が受けられ、10月から加入される場合は1,500円、11月からは1,250円、12月からは1,000円となります。

植物園の入園窓口で随時入会を受け付けていますので、お気軽にお申し出ください。

富山県中央植物園だより　2002. 10・11・12月号　平成14年10月1日発行（年4回発行）
編集・発行　富山県中央植物園　〒939-2713　富山県婦負郡婦中町上轡田42　Tel.076-466-4187
印刷　北日本印刷株式会社